

干潟再生事業をめぐる住民の認識

Citizens' perceptions towards tidal flat restoration projects

○山下 博美 (立命館アジア太平洋大学)・三上 直之 (北海道大学)

Hiromi YAMASHITA (Ritsumeikan Asia Pacific University)・

Naoyuki MIKAMI (Hokkaido University)

hiromiya@apu.ac.jp

埋立てや干拓で造成され、今は遊休地となっている土地に海水を再導入して行う干潟再生は、かつては耕作されていた土地の環境を短期間で不可逆的に変化させる点で、自然再生事業の中でも劇的なタイプといえる。オランダやイギリスにおいては事例があるが、国内ではまだほとんど例がなく、本格的な取り組みは三重県志摩市の英虞湾で 7 年前から行われているものが初めてである。本報告では、志摩市の事例も含めた干潟再生の事業に対する住民の認識に着目する。

遊休地への海水導入による干潟再生は、高潮時の災害リスクや、再生する干潟自体が泥っぽく魅力的ではないと捉えられがちな場所であるなど、否定的反応を喚起する要素も少なくない。その一方で、再生の意義や理由づけにも多様なものがある。

英虞湾で 2015 年に行われたインタビューや、2016 年に行われた質問票調査においては、干潟の再生事業が、総じて好意的に受け止められていることが分かった。しかし、すでに事業が実施されている地区の住民は効果を実感できるところまでは至っていない。又、財政的負担や災害のリスク、先代が切り開いた土地を失うおそれなど、事業に伴う負担や、影響の不確実性に対する不安も存在した。今後、この事業をさらに進めようとするなら、住民に対して干潟再生の意義を説明し、説得するだけでは不十分であり、上述のような懸念を拾い上げて共有し、コストやリスクを分担できるしくみをつくることが求められる。事業の早い段階から議論をオープンにし、住民参加をさらに進めることも必要である。

キーワード： 市民・認識・干潟再生・英虞湾・イギリス